
俺は断じて認めない！

佐多ヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺は断じて認めない！

【Nコード】

N2000R

【作者名】

佐多ヒロ

【あらすじ】

平凡男子学生の俺、山田。

学期末のテストを境に、平凡が音を立てて崩れる。

つい最近まで引き籠もりがちだった、小川光（仮） にプチストーキングされ、美少女、長沼剛男 に懷かれ…。
ふっ…、返せ、俺の平凡を。

ハートフル学園ラブコメディ、ここに開幕！

（待て、ラブコメになるのか！？）

ぼろりもあるよ！

（ヤメロオオオ！）

凡才ですが、なにか？…あ、でも今回はかりは、赤点みたいです。

特筆する事もなく、俺は凡人である。

頭は良くもなく悪くもない。

目と鼻、口が付いた顔は、一度見ただけでは記憶に残らない程特徴の無い顔だ。

運動神経だつて、この前のスポーツテストは全国平均とぴつたり同じ数値だった。

やはり所謂、普通なのである。

そんな俺は、ブレザーに身を包む学生で、日々学舎という箱で、専ら学業に励んでいる。

まあ、間違つても、模範生ではないからそれなり（教師に目を付けられない程度）に、羽目を外しているけれども。

長期休みを間近に控えた今日は、地獄のテスト2日目。

些か面倒だが、仕方ない。気を抜けば、平凡な成績も、ある種非凡になりえるのだから。

時が長い…。

テスト終了時間が、またまだなのに関わらず、俺の解答用紙は、開始から殆ど変わらず白いまま。クラスと名前の欄と前半の問題が少

し埋めてあるだけ。

ぐっ

たまらず、鉛筆を握る手に力が入った。

解けない。

まるで解けない。

ヤマを外した、尚且つ、応用ばかりとなつては、手も足もでない。

俺の前に座る奴の背中を見つめる。

ああ、もうそれは穴が開くほど。

本当に開けば、答えが見えるのに。

じーっと、瞼も動かさずに見ていると段々奴の背中が透過してきて、
答えが…なんて、そんなSFチックなうまい話もあるはずない。

追い込まれた状況で為す術もなく、無情にも終了のチャイムが鳴り響いた。

この時は、知る由もなかった、真っ白に燃え尽きた俺を見て、笑いを堪える人物が居たことなど。

一 平凡完全崩壊一步手前。…何この漢字ばかり且つ、不吉なタイトル。

正直、終了のチャイムが鳴ってからの記憶があまりない。

教室から校門でこんな遠かったか？

「よ、山田！お疲れちゃん」

ぼんどころか、肩にずしりとした重みが加わる。突然だったから余計に重たく感じた。

「どーした？冴えない顔が、更に澁みきってるぞ」

一言も二言も多いのは、隣のクラスの宮島だ。こいつは凡人の俺とは違い、秀才という人種だ。小さい頃から知っている、良く言えば幼なじみ、聞こえが悪いと腐れ縁。

「あー、もう。放っておけ、…」

「ありやりやー、さてはテストしくったな？」

「…言っな、聞くな、話題に触れるな」

にやにやと探偵の真似事をする宮島が、凄く憎たらしく見える。

その銀縁眼鏡、叩き割って良いだろうか？

「確かに、今回の数学は応用とか捻り問題が沢山あった」

「とか言って、お前は普通に解いたんだろうな」

「まあ、うん。それなりに。…休みに学校に缶詰になって補習は勘弁願いたいし」

嫌味か？嫌味なのか？

そうでなければ、忍耐力調査？俺の沸点がどれくらいか調べるつもりか？

くっ、目頭が熱いぜ…

ふふふ、ははは、そうか宮島。そんなに眼鏡を割って欲しいんだな？

任せろ！

この眼鏡クラッシャー山田（自称）が破片が飛散しない様に、叩き割ってくれよう！

「くす」

背後から忍び笑いが聞こえた。

余裕だな、宮島、だがしかし…！

交わせるか？俺のこの渾身の！！

「笑ってる！次の瞬間にお前の眼鏡は…え？」

拳を固め、勢い良く振り向くも眼鏡クラッシャー（自称）の攻撃は不発に終わった。

行き場を失った拳が、力なく下降する。

「え、と、どちら様？」

俺視線の先には、女の子。

しかも見覚えありまくりの銀縁眼鏡を掛けている。

「山田の知り合いかと思ったけど違うの？校門らへんから一緒だったよ。お前が目頭を抑えて肩を揺らしていた時ぐらいに、鮮やかな手捌きで俺の眼鏡を持ってたけど」

宮島、詳しい状況説明ありがとう。

2人して失礼を承知で、まじまじと女の子を見る。

銀縁眼鏡以外全く見覚えがない。

宮島も俺も、互いに顔を見合わせて首を傾げた。

二 平凡完全決壊。…厄介な奴に好かれた、どうなる俺！

「ふふ、私、小川光って言います！」

突然現れた女の子は、前触れもなく名乗り、「はい」と俺の顔に眼鏡をかけた。

「また、明日！眼鏡クラッシャーさん！」

固まってる俺たちを一瞥してから、女の子は手を振りながら走り去って行った。

なんだなんだなんだ？

頭が全くついて行かないんだが…

やたら、フレンドリー？

制服を着ていたし、とりあえずは同じ学校だ、よな？ま、まさか、コスプレとかじゃ…い、いや。いくらうちの学校の制服に定評があるからって、こすぷ…っああつ、否定出来ない！

しかしながら、見覚えはないが、女の子が名乗った名前は、何だか聞き覚えがある気がした。飽くまでも気だが。うん？どこだったか。

思い出しそうで思い出せない感覚が気持ち悪い。曲名も歌詞も出て

来るのに、歌手がわからないみたいな感じだ。

もやもやもやもや

「あの子、山田のクラスじゃないのかな？ほら、【おがわ ひかる】
って、新学期からずっと来てないって言ってなかった？」

あー、だ、うーだ唸っていたら、我らが宮島がぽつりと呟いた。

「ああ…！」

もやもやが一気に吹き飛ばされた。
そうだ。

ナイス宮島！

この際、隣のクラスのお前が、なんでそんな事を知っているかなん
て気にしない。

「今居るなら、テスト、山田と一緒に受けたって事だね」

「いや、もう、自分いっぱいだったんで！わからないッス
！」

「…、何キャラだ。しかし。登校拒否ってた女の子が自ら名乗るっ
て、お前何したの？」

「何もしてない。テスト受けたただけだしな」

小川が去って、いつもの下校風景に戻る。あー、落ち着く。
いきなり現れたから何かと思ったが…、ふう、やっぱりいつも通り
が一番いいな。

明日テスト最終かー

なんて、お互いに呟いて、採点休みの日は、久々に電気屋行くかと
か約束をして、家に帰る。

それからもやっぱり、いつも通り平凡に、飯食って、風呂入って、
テレビ見て、寝た。

翌朝も普通に、携帯アラームを一度止めて寝て、母親に3回起こさ
れ（最後は背中蹴りが入る）起きたし。顔を洗ってから、ご飯、
味噌汁、目玉焼きを食べて、歯磨きをして、支度を整えるのも、い
つも通りだった。

だから、忘れていた。

普段通り過ぎて、忘れていたんだ。昨日のイレギュラーの存在を。

その存在を思い出したのは、行って来ますと玄関のドアを開け、門
を出たとき。

「おはよう、山田君！」

彼女は昨日と何ら変わらない笑顔を浮かべていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2000r/>

俺は断じて認めない！

2011年10月8日19時14分発行